

名古屋造形大学新CIプロジェクト
New CI for Nagoya Zokei University of Art & Design

東仲雅明
Masaaki Higashinaka

NAGOYA
ZOKEI
UNIVERSITY OF
ART & DESIGN

名古屋造形大学シンボルロゴタイプ

はじめに

一般的にCI (Corporate Identity) は企業活動に関わることを指している認識が殆どであるが、Corporateの和訳は「法人の」「団体の」でもあり、大学のアイデンティティ構築についてもCIということばとその概念を充てるべきだと考える。ⁱ

いずれにせよ、CIは団体が持つべき確固とした理念とそれに基づく行動の統合であることに変わりはない。ゆえに、このプロジェクトは既存のシンボルマークやロゴタイプのビジュアルアイデンティティ (VI) 刷新の業務のみであったという記録に留めてはならない。本稿は、本学が採った新CIの考えと経緯、デザインの具体化をまとめた論述とする。

新CI導入の経緯

社会環境を見据え、それまで名古屋造形芸術大学が行ってきた実績ある教育について、美術・デザインの2学科から1学科制への移行やコース・クラスの新設、四大への一本化といった組織の見直しを中心に行う大改革を契機に、2008年4月に大学名の改称を含めた新CIの導入がなされることとなった。

まず、新大学名称については、学長諮問委員会が設けられ、名古屋造形芸術大学にかわるものとして、いくつかの検討案のなかから『名古屋造形大学』が選ばれ、さらに学内に本学教員6名から構成されるCIワーキンググループが形成され、その具体化推進にあたることとなった。

理念形成へのアプローチ

前述の通り、組織団体には、理念がなければならない。大学は、社会に出るに必要な技術のみを学ぶ場所ではなく、卒業後の社会人人生を全うするに必要な影響を及ぼす人間形成の場であると私は考えている。従い、大学の理念というものは、ただ高邁なものでもなく、その時々々の長の個人的メッセージでもなく、在学生・卒業生・教職員の行動の拠り所となる、できるだけわかり易い (= 覚え易く、語り易い) 普遍的な共通概念でなければならないと考えた。

新CIワーキングチームの最初の会議のなかで、私は、

新しい大学イメージ形成の礎を明確にするため「この大学は、ひとことで言うとどんな大学なのか？」という最も基本的な問いかけ (このプロセスはCIのセオリー通りの、不可欠で最も重要なことである。) を行った。これは、私自身がこのプロジェクトの前年にこの大学に参加したから知りたかったからではなく、「今これから我々の大学はどうあるべきか」について、開発推進するワーキングメンバーが大学のアイデンティティを改めて自身で問い直し、そぎ落とした言葉でまず共通認識を持つことが最重要だと思ったからである。交わされた意見のなかには、「実践的な教育」「国際化」「工房の充実」「在野精神」を、これまで名古屋造形を語る言葉としてきたが、この大学の特徴を明快に語れなかったと思う」という意見もあった。私はここで「名古屋造形大学は、『かたちをつくる大学』である」という提案を行った。(この、一見全くひねりのない考えの由来については以降に述べる。)

理念の形成

「名古屋造形大学は、読んで字のごとく『かたちをつくる大学』です」というのは「わかり易さ」では最大の効果を持っている。だが、平易ゆえにその提案にあたって、「かたち」をどう理念のなかで我々自身のものとして形成するかが大きなポイントになるという考えから、以下のように「かたち」ということばの持つ力のまとめを行い、提案時に併せて述べた。

まず、日本の漢字研究の第一人者である白川静氏によれば、漢字の「形」は、“…木の枠を組んだ鋳型 (鋳物を造るために溶かした金属を流し込む型) の外枠である。この鋳型によって形成された鋳物 (溶かした金属を型に流し込んで作った器物) の「かたち、美しいかたち」を形という。多は色や形の美しいことを示す記号のような文字であるから、形は鋳物の形が整って美しいことをいう。のち形は鋳物以外をも含めて、物の「かたち、またひとの「すがた」の意味に使う。”ⁱⁱ とし、「かたち」については、“「かた」は外面、「かたち」はその内面を含めていう語であろう”ⁱⁱⁱ としている。つまり、「かたち」は、我々のようなアートとデザインの大学にとってかけがえのない「美」につながる大切なことばであり、また「すがた」は人の有り様、すなわち人間形成の場として大学が学生にもたらすべき結果に他ならない。

また、デザイン学の向井周太郎氏は「かたち」について、「かたち」の「ち」は、「いかづち（雷）」、「をろち（蛇）」、「いのち（命）」などという自然の根源的なはげしい力「ち（霊）」を意味し、「かた」が生きている姿であるとするのが、「いのち」の場合が「い（息）」と「ち」（自然の力）の結合「息の勢い」であることを考え合わせると”妥当である”の思いと、「かたち」がパフォーマンスを含意していることについて述べられている。^{iv}これはあくまで同氏の論述の一節に過ぎないが、私は同朋学園の建学精神『「共なるいのち」を生きる』の概念に共鳴すると思い、我々の持つべき「かたち」の考えについて、「造形」は「ものづくり」の表層を指すのではなく、「かた」に「ち」（「いのち」「血」「知」「智」）を吹き込む行為であり、それは本来あるべき形を提案することや伝統的な「かた」に新しい「血」を入れること、社会的諸問題に対して解決の「かたち」を見いだすことである、とまとめた。ワーキンググループ内では、これらの考えをもった「かたちをつくる大学」は、思想にふくらみが出せるという評価も得て、新CIの基本コンセプトに据えることとした。（また、この内容は一部修正加筆の上、大学案内に掲載されるとともに、2007年7月の改称披露の場でもCIコンセプトとしてリーフレットで紹介がなされた。）

また「かたちをつくる」ことは、そこに「人」を加えて見つめたさいには、かたちをつくる「人」と「形づくられるもの」、また「形づくられたもの」を介して人と人とが関わり合うことなど、同朋学園が謳う「関係的存在」としての目覚め^vにつながっている。

新シンボルロゴタイプのデザイン

CIの視覚的部分での中心をなす新しいシンボルロゴタイプのデザイン開発については、前述のCI基本コンセプトをふまえ、大学始まって以来の大改革に相応しい強いビジュアルインパクトのあるもので、従来の名古屋造形のデザインとは全く異なるもの、また、対象は学生募集の面から高校生も含むことなどが骨子となった。また略称「NZU」のみ残すが、色彩と使い方は新しいもので対応すること、強い・かわいい・軽い・POPなものが方向性で見えてくるのもひとつ、ということなどが高北幸矢学長よりまとめ示された。

私は、以上のことがら前提とし、

①「NZU」ロゴ／純粹にその形状変更で新しさを求めるというもの。しかし、ことばの響きが変わらないこともあり、イメージ刷新が期待できないとの考えもあったが、小文字で組むことも含め検討をする。

②「NZU」マーク／文字ベースラインや可読性にこだわらず文字を配置したもの。（3文字が目鼻口で顔に見えるなどかわいい”方向も含む）。

③「NAGOYA ZOKEI」ロゴ／「ZOKEI」表記で刷新をはかるもの。さらには、漢字の「形」のつくりである「彡」を「E」と関係づけたデザイン。

④「彡」マーク／③から発展し「彡」を最大限象徴化し、代表するイメージを従来の文字からシンボルマークに転換することによって新しさを出す。

という4方向でのデザインアイデアを作成し検討することにした。（下図、各方向からの抜粋案参照）

検討のなかで、私は①②では前述のコンセプトを全うするには役不足で、③④でのデザインがそれに見合う方向性であることの確信を持つに至った。



デザインアイデアは私を含む3名の学内デザイナーによってプレゼンテーションされ、ワーキンググループメンバーが各自の意見を述べたのち、高北幸矢学長がデザイン決定を行なった。

決定案は前述③に属する私の提案で、欧文ロゴは直線と円弧で、和文ロゴは直線のみで構成したもの。和・欧文ともに従来の重厚なロゴに対してライトだが、「多」の造形要素により視覚的な「引っかかり」を持たせており、見たひとに「何故」と思わせ、そこから理念へと繋がる流れをつくるという仕組みを持ったデザインである。つまり、我々は新しいシンボルロゴタイプを見せることで、同時に大学の理念を語ることもできるという訳である。

また、イメージカラーは、緑溢れるキャンパスを象徴するグリーンとすることに変わりないが、それまでの濃い色調から、生命の息吹を感じるような彩度・明度の高いものへと刷新^{vi}した。

また、案決定後、細部の詰めをおこなったが、特に和文についてはタイポグラフィに関して高い知識と経験を持った本学非常勤講師（当時）の伊藤恵氏にブラッシュアップの協力を依頼し、完成度を高めた。

改称披露

関係者への改称披露は2007年7月に『「名古屋造形芸術大学」の大学名改称ならびに改組披露』として学外会場を借りて開かれた。この会は受付から司会進行、ビジ

ジュアルプレゼンテーションとそのナレーションに至るまで可能な限り教職員の手によって行なわれた。当時学長からも「手作りで行うほうが、むしろ伝えるうえで効果的である。」とのご意見もあったと記憶している。私も同意見を持っている。我々の規模の団体のCIに関する事は、前出の考えの部分も含め（アドバイスを求めるなどの効果的活用は別として）外部組織への丸投げを避け、自らが主導権を持つこと、構成員の手作りの部分を多く持つことが組織の一体感を持つうえでも重要なファクターであると考えた。

アプリケーションデザイン

CIには様々なアプリケーションデザインへの展開が必需となるが、学外の道路と入口に設置のサインシステムや駅の広告看板、専用バスは、一般の方々の目に毎日のように触れる重要なものである。

バスのデザイン刷新については、それまでのバスの後部に斜めに配された太い帯部分が塗装によるもので、塗り替えを施すと莫大な費用が発生するため、変更のコストを抑えてリニューアルすることが条件となった。その解決策としては該当部分をカッティングシートで覆うこととし、そこに新しい大学カラーの明るいグリーンでキャンパスの豊かな木々の木漏れ日や風をイメージしたグラデーションパターンを配し、軽やかで明るいデザインにまとめた。また、様々なアイテムのデザイン展開をする際、シンボルロゴの独立性に充分注意を払った。



NAGOYA
ZOKU
UNIVERSITY OF
ART & DESIGN



まとめ

冒頭に述べたように、CIは理念と行動の統合であるべきで、良い大学イメージ形成のためには、そのビジュアルとともに教職員や教育の質の高さそのものが最も重要なファクターである。CIで採用されるマークやロゴタイプのデザインは、商業広告より長いライフサイクルが求められる。瞬間的な目新しさになびくのではなく、自身の背景や根拠を明らかにしたうえで長期的展望に立った考えが必要である。今回刷新された名古屋造形大学のものを含め、新しいVIは日経つにつれて見慣れたものとなりデビュー時の目新しさの刺激は減ってゆく。しかしそのかわりに、その組織団体の培うイメージを身にまとい、関わる人々の心の中にブランドイメージを醸成してゆくという基本を改めて確認しておきたい。

註・引用・参考文献

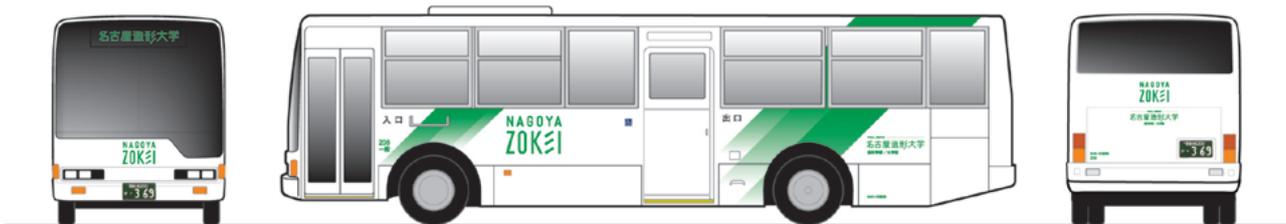
ⁱ 大学のアイデンティティの表記としては、UI (University Identity) とする考えもあるが、UIは現在ユーザーインターフェース (User Interface) の略称としての使用が一般化されており、混同を避けるためCIとするのが妥当と考える。

- ⁱⁱ 白川静『常用字解』平凡社 p146
ⁱⁱⁱ 白川静『字訓』平凡社 p228
^{iv} 向井周太郎『かたちの詩学』美術出版社 p34
^v 同朋学園『共なるいのち』(2008年7月) p1 / 『人間』は文字通り、他者とのかかわりの中で、それぞれの生を営んでいます。他者が在るからこそ自分も在るという「関係的存在」。それが私たち人間の在り方にほかなりません。しかし、このような関係的存在を生きる私たちは、他者との間に、確かな結びつきを持っているのでしょうか。本当に豊かな関係を生ききれているのでしょうか。弱い者がいじめられたり、異なることによる排除や差別があったり。むしろ現実には、本来あるべき「共生」ということとは遙かに遠い生き方をしていないのでしょうか。他者へ、社会へと働きかける中から、「関係的存在」としての私たちの在り方に正しく目覚め、あらゆる差異 (ちがひ) を認め合い、それぞれの個性が輝くような豊かな関係を取り戻していく歩みが始まります。この歩みこそが「共なるいのち」を生きることへの関係回復の歩みであり、同朋学園に学ぶ私たちに願われていることなのです。幼稚園、高校、短期大学部、大学、それぞれのステージで私たちはこの願いに目覚め、学び続けています。
^{vi} プロセスカラー=C100+M10+Y100+K0

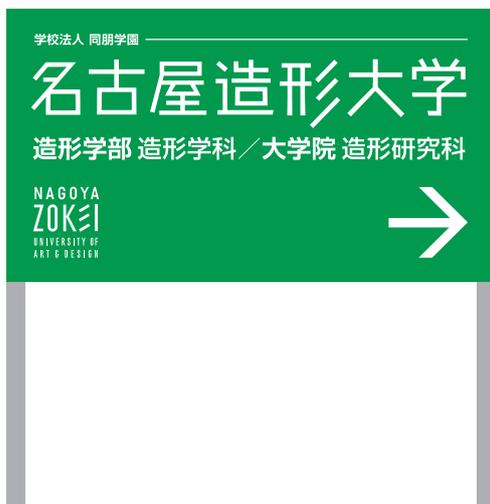
名古屋造形大学

名古屋造形大学

NZU



大学専用バスの新旧デザイン比較。(上=新デザイン、下=旧デザイン)



JR春日井駅広告看板 (2500×700mm)

案内サイン/道路案内サイン (左) と、大学入口サイン (右)

JR千種駅広告看板 (3860×2360mm)

名古屋造形大学

JR春日井駅から専用バス約20分

- 日本画コース
- 洋画コース
- 洋画コース・版画クラス
- 彫刻コース
- 先端表現コース・総合造形クラス
- 先端表現コース・映像 / アニメーションクラス
- マンガコース
- 視覚伝達デザインコース
- イラストレーションデザインコース
- デジタルメディアデザインコース
- 建築デザインコース
- インテリアデザインコース
- プロダクトデザインコース
- 工芸コース
- ジュエリーデザインコース
- アートプロデュースコース

〒485-8563 愛知県小牧市大草年上坂6004
TEL.0568-79-1111 (代)





学生必携



レターヘッド



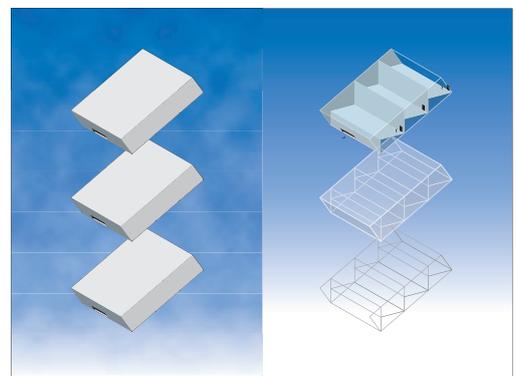
機関誌



オープンキャンパスTシャツ



手提袋／標準（上）
大学案内資料用（下）



セカンドライフ キャンパス棟